

仏種の下種と仏性——三因仏性についての一考——

日 比 宣 俊

I

仏種と仏性の語義が元来同一概念の異表現に外ならな
いと思考されていることは周知の如くであるが、日蓮聖
人は末法濁悪の衆生に対しさかんに仏種の下種を主張さ
れる反面、『本尊抄』等には仏と衆生の同体即具を論じ
られている。すなわち、もし仏種と仏性が同一概念のも
のであるとするならば、仏と本来同体の衆生（本来仏の
性質のある衆生）に新たに仏種（仏の因性）を下種する
必要はないはずである。そこで前回はこの矛盾点を考証
する手掛かりとして聖人の下種論の論理的依文と思考さ
れる天台大師智顛の『法華玄義』巻一上に説かれる三益
に関する所説を概観したが、この三益論の所説に於て
は、仏種とは全ての衆生に本来潜在する普遍的な仏性を
開発するために新たに施される円教等の聞法を指したも

のであり、一応仏性と区別して用いられていると思われ
ることを指摘した（1）。しかしながら、日蓮聖人の遺文
を顧みると、仏種と仏性の意味を明確に区別していると
思われる文章はほとんどないばかりか、文永十年の『観
心本尊抄』には天台智顛等の主張する三因仏性を仏種子
と換言されたと理解できる箇所があり、更に建治四年の
『始聞仏乘義』には三因仏性を三因仏種と表現したと思
考できる箇所もある。すなわち三因仏性を仏種と換言し
たと思考するならば仏性≡仏種ということになり、日蓮
聖人は衆生が本来仏と同体であることを認めた上で更に
この衆生に仏性すなわち仏種の新たな下種を主張したこ
とになってしまふのである。しかしこの三因仏性に対す
る天台智顛の所説を調べると、既に『法華文句』等に
正、了、縁の三因仏性をそれぞれ正因仏種、了因仏種、
縁因仏種と表現した箇所があり、仏性と仏種を明確に区

別していないと思考できる所説もあるが、又三因仏性
 総じて中道実相理と見做し、それを仏性の一語に集約し
 たと思考できる所説もある。そしてこの立場でいう仏性
 (中道実相理)は必ずしも下種すべき仏種とは思考され
 ていないようである。そこで今回はこの智顛の三因仏性
 に対する二通りの解釈とその関連性について考察して
 みることにする。

II

天台大師智顛はその著述の処々に三因仏性について触
 れているが、『法華玄義』に於いては卷五上の迹門十妙
 の第五三法妙を釈する段にこの三因仏性についての記述
 が見える。この三法妙の段では

言三法者即三軌也。軌名軌範。還是三法可軌範
 耳(6)。

とまず三法が三軌であると釈名したのち、(1)総じて三軌
 を明す(2)歴別に三軌を明す(3)麤妙を判ず(4)開麤頭妙(5)始
 終を明す(6)三法を類通す(7)悉檀料簡の七項目に分けて三
 軌を説明しているがこのうち(1)の総じて三軌を明す頁で
 は、三軌が真性軌(真如実相の理)・観照軌(真性軌を顕
 し出す智徳)・資成軌(観照軌を資けて真性軌を顕し出す

願行)であることを明かし、そして(6)の三法を類通する
 中に於いて

類通三仏性者。真性軌即是正因性、観照軌即是了因
 性。資成軌即是縁因性(3)。

と三因仏性が三軌にあてはまることを示している。この
 類通三法の段に於いてはこの三因仏性の他に図表(-)の如
 く、三道・三識・三段若・三菩提・三大乘・三身・三涅
 槃、一体三宝・三徳の計十種の三法を挙げて、これら三
 法のそれぞれが三軌と類通することを明かしているが、

図表・(-)

7	6	5	4	3	2	1	
三 身	三 大 乘	三 菩 提	三 般 若	三 仏 性	三 識	三 道	三 軌
法 身	理 乘	実相菩提	実相般若	正因仏性	菴摩羅識	苦 道	真性軌
報 身	隨 乘	実智菩提	観照般若	了因仏性	阿黎耶識	煩 惱 道	観照軌
応 身	得 乘	方便菩提	文字般若	縁因仏性	阿陀那識	業 道	資成軌

8	三涅槃	性淨涅槃	円淨涅槃	方便淨涅槃
9	三宝	法宝	仏宝	僧宝
10	三徳	法身	般若	解脱

(7)項めの悉檀料簡の段では

問十種三法及余一切。皆是三軌者。唯応三軌。何意
異説(4)。

と三軌と十種三法との同異を問ひ、その答えとして

衆生機宣不同。応隨機説逗。悉檀方便引接耳。随俗
故異。称便宜故異。遂対治故異。令人入道故異(5)。

と三軌に十種の異名があるのは衆生の心のはたらきに合
わせた悉檀の異なりのためであり、所願の義は同一であ
ることを示している。すなわち十種三法の苦道乃至法身
は三軌の眞性軌と同一であり、業道乃至解脱は資成軌と
同一ということになるから、十種三法の一つである三因
仏性は他の九種の三法と所願の法から見れば同等と思考
できることになるが、『法華玄義』卷二下に於いては、

この十種三法のうちの三因仏性と三道、並びに三徳との
関係について次の如く述べている段がある。すなわち
『涅槃経』の「十二因縁を名けて仏性と為す」の文を解

釈して、

無明愛取既是煩惱。煩惱道即是菩提。菩提通達無復
煩惱煩惱既無即究境淨。了因仏性也。行有是業道即
是解脱。解脱自在縁因仏性也。名色老死是苦道。苦
即法身法身無苦無樂是名大樂。不生不死是常。正因
仏性(6)。

とある。この部分は迹門十妙中の広解境妙の第二、十二
因縁の境を明す中、不思議不生不滅の十二因縁すなわち
円教の十二因縁を明す段に述べられたものであるが、こ
れによると十二支のうち過去因である無明と、現在因で
ある愛、取の三支は三道の内の煩惱道であるが、円教の
立場では煩惱即菩提(般若)であるので了因仏性(智)
となり、過去因である行と現在因である有の二支は業道
であるが、円教の立場では業道即解脱なので縁因仏性
(行)となり、又、現在果である名色と未来果である老
死の二支は苦道であるが、やはり円教の立場では苦即法
身なので正因仏性(眞如理)となる。そしてこのように
十二因縁の中に三因仏性が具備されているので、十二因
縁を仏性と名づくのである。すなわちここでは円
教の立場に於いて図表(二)の如く、三因仏性が三道、三徳
と同等であることを示している。

図表・(二)

	1	2	3
三因仏性	正因仏性	了因仏性	縁因仏性
三 道	苦 道	煩惱 道	業 道
三 徳	法 身	般 若(菩提)	解 脱

すなわち以上のことから三因仏性は三軌のみならず、三因仏性をのぞく他の九種の三法とも類通すると思考することができる。

そして(1)項の総明三軌の段では、真性軌・観照軌・資成軌の關係について、

名雖有三祇是一大乘法也(7)。

と述べ、又、

十方諦求更無余乘。唯一仏乘。一仏乗即具三法。亦名第一義諦、亦名第一義空。亦名如来藏。此三不定

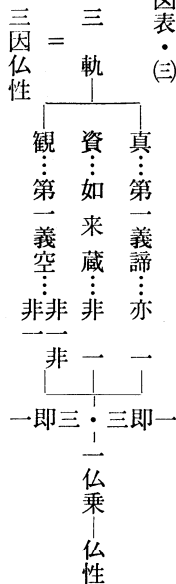
三三而論一。一不定一一而論三(8)。

と、三軌は真性・観性・資成という三種の名称により構成されており、一性二修と各々その徳を異にしてはいるが、三者の体は同一であるので実は一仏乗の法にすぎず、そしてこの一仏乗の法すなわち三軌の異名が第一義諦・第一義空・如来藏であり、而もこの三者は三即一、

一即三と円融相即すると指摘している。また更に、
 仏性者。亦一非一。非一非非一。亦一者。一切衆生
 悉一乘故。此語第一義空。而皆称亦者丁重也。祇是
 一法亦名三耳。故不可单取不可複取。不縦不横而三
 而一(9)。

と、前引文の一仏乗すなわち三軌の真性・観性・資成の異名である第一義諦・如来藏・第一義空のそれぞれは涅槃経でいう亦一・非一・非一非非一の三句にあてはめることができるが、この三句は而三而一と円融相即するのであり、実は一法の異名にすぎず、この一法を仏性と呼ぶと取意できる文を示している。これを図示すると図表(三)のようになるが、

図表・(三)



このことから智顛は真性・観性・資成の三軌は相互に円融相即すると思考し、さらにこの状態を総括して仏性と思考していたと理解することができる。そして前述の智顛の見解によれば、三軌は三因仏性の異名でもあるから

正因・了因・縁因仏性の三者も円融相即することとなり、この三因仏性も仏性の一語に集約できることになると考えられるのである。

また荊溪湛然(七一〜七四)は前に引用した『玄義』卷二下の「十二因縁名爲仏性」を解釈した文を扶釈して、

大経十二因縁名爲仏性。仏性即三因也(10)。

と、十二因縁を仏性とするがこの仏性とは三因仏性のことを指すとしている。更に『玄義』卷三上の迹門十妙の第二、智妙中の十二因縁の境に対して智を論ずる段の扶釈に於いては『涅槃経』でいう四種十二因縁観のうちの上上智観の立場、すなわち円教の立場から

十二因縁名爲仏性。仏性者第一義空。第一義空名爲中道。中道名仏。仏名涅槃(11)。

と述べ、ここでも十二因縁を仏性と名けているが、この仏性とは第一義空・中道・仏・涅槃と名異義同であるとしている。すなわちこの解釈によると、湛然も智顛も同様に正・了・縁の三因仏性の円融相即する状態を総括して仏性と思考していたことになり、この仏性とは中道実相理にほかならないと理解することができる。

III

しかしこれに対して『法華文句』卷第四下では、法華経方便品の「仏種從縁起」の文を扶釈する段に於いて、

仏種從縁起者。中道無性即是仏種。迷此理者。由無明爲縁。則有衆生起。解此理者。由教行爲縁。則有

正覚起。欲起仏種須一乗教。此即頌教一也。又無性者即正因仏性也。仏種從縁起者。即是縁了。以縁資了正種得起(12)。

と正因仏性を仏種と見做す文が見える。ここでは中道無性すなわち真如理を仏種と見做し更にこの仏種を正因仏性としており、そしてこの仏種である正因仏性が、了因仏性と縁因仏性を縁として顕現することを仏種從縁起と解釈している。すなわちここでは、正因仏性のみを中道実相の真如理と見做しこれを仏種と規定しているので、前のように正因・了因・縁因仏性の三者が円融相即する状態を総括して中道実相理と見做し、それを仏性の一語に集約する場合は異なるようである。また『法華文句』卷六上の譬喩品釈では

今経明小善成仏。此取縁因爲仏種。若不信小善成仏。即断世間仏種也(13)。

と縁因仏性を仏種と見做している。また『法華文句』卷十上の不輕品釈では、

正因仏性通亘本當。緣了仏性種子本有非適今也⁽¹⁴⁾。
と縁因仏性と了因仏性をそれぞれ仏種と見做したと思
できる文がある。

IV

以上の諸文から考察すると、天台の三因仏性に対する
解釈には前述の如く、

①三因仏性を総括して中道実相理と見做しこれを仏性
の一語に集約する場合。

②三因仏性を別々に正因仏種・了因仏種・縁因仏種
と、仏種であると思考する場合。

の二通りの解釈があると思考することができるのである
が、『法華玄義』卷九下五重各説の「明宗」の
段では、正因仏性について立場の相違によりやはり二通
りの解釈があることが示されている。すなわち、

例如正因仏性。非因非果而言是因。非果名仏性。是
果非因名大涅槃⁽¹⁵⁾。

とある。この文は宗玄義（修行の要・仏自行の因果）を
解釈するのに(1)簡宗体(2)正明宗(3)衆經同異(4)明麤妙(5)結

因果の五項目を立てる中の(1)簡宗体の段にのべられたも
のであるがこれは有人が、

宗即是体体即是宗⁽¹⁶⁾。

と主張した説を、智顛が、

宗致即是因果。因果即二体。非因非果体即不二。体

若是二体即非体。体若不二体即非宗。宗若不二宗即

非宗。宗若是二宗即非体。云何而言体即是宗。宗即

是体⁽¹⁷⁾。

と破斥する段中に述べられた文である。そしてこの段の
解釈によると、

今言不異而異。約非因非果而論因果。故有宗体之別
耳⁽¹⁸⁾。

とある如く本来法は無別であり不異なものであるが、こ
の法は非因非果の体の立場から見ると、あるいは因果の
宗の立場から見ると、義が異なると述べら
れている。そして

当知実相体通而非因果。行始弃因。行終論果⁽¹⁹⁾。

と理論的な体の立場から見れば法である中道実相理は相
対的二元の立場を離れるので、原因があつて結果がある
というような二元的立場はとらないのであるが、実践面
からみれば実相の体を顕現するための行の発端として因

を立て、その結末として果を論ずるとしている。そして前述の正因仏性についての文はこの体と宗との関係を例する部分に述べられたものである。すなわち、正因仏性は体の立場から見れば非因果の中道実相理にほかならないので修因と証果を論ずる必要はないのであるが、これを実践面である宗の立場から見れば中道実相理を覚知するための手段として行の始の因と行の終りの果が弁じられるのである。

しかしこの文では「例、正因仏性」とある如く、三因仏性の中の正因仏性のみを例として体と宗との関係を述べているので、体の立場からは正因仏性のみが非因果の中道実相理であるような表現になっているが、円教の三法は一即三・三即一と円融相即し、この状態を中道実相とするのであるからここには正因仏性のみを例として挙げていてもこれを非因果の実相理と見る以上はこの正因仏性には了因・縁因も具すると思考することができよう。そしてこのように考えると、前に指摘した智顛の三因仏性に対する二通りの解釈のうち、①の三因仏性を総じて中道実相理と見做しこれを仏性の一語に集約する場合は三因仏性を理的な体の立場から見たものと理解することができる。すなわち体の立場から見れば三因仏

性の三法は円融相即しこれを中道実相理とも仏性ともいうのである。

そしてこれに対し宗の立場から正因仏性を見ると、智顛の主張によれば

是因非因果名仏性。是因果非因名大涅槃(16)。

とあるように是因非因果と因果非因とに分けられ、行の因のみを仏性と呼ぶのに対し、行の果を大涅槃としていふ。また「明宗」の第五結因果の段では、

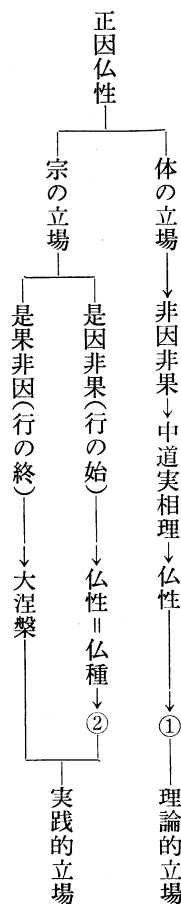
若取性徳為初因者、彈指散華是縁因種。隨聞一句是了因種。凡有心者是正因種。此乃遠論性徳三因種子(20)。

と、博地未発心の凡夫の性徳を果に至るための初因とするのを例として、この初因である性徳が了因・正因・縁因の三因種子であると明している。すなわち前引文では果に至るための行の因を仏性と規定していたが、この文ではその仏性である初因を仏種と規定しているので、このことから実践面である宗の立場に於いては因を仏性と名づるのであるが、この場合の仏性は仏種とも呼ばれ、仏性と仏種の両者に明確な区別をしていないと思考することができるのである。

しかし前回の発表でも指摘した如く、仏性といった場

合には（性とは不改の義であるから）全ての衆生に本来潜在する普遍的な仏としての性質と解釈できるのに対して、仏種といった場合は、衆生が仏となるために新たに外部から植えられる有為の因事であるというイメージがある。そしてこのことから考えると、ここでいう仏種とは、中道実相理を覚知するための実践的立場から、行の因としての仏性を仏種と還言して表現したものと思考することができよう、すなわち、前に指摘した智顛の三因仏性に対する二通りの解釈のうち②の三因仏性を別々に正因仏種、了因仏種、縁因仏種と仏種であると思考する場合とは、三因仏性を実践的立場から観たものと思考することができる。ここで以上述べてきた正因仏性に対する宗と体の立場からの二面の釈と、三因仏性に対する二通りの解釈との関係を図指すると、図表(例)の如くなる。

図表・(例)



指摘したように、日蓮聖人が『本尊抄』に仏と衆生の同体即具を主張された上で更に仏種の下種を主張されているという矛盾は、理論

V

以上、天台大師智顛の著述に見られる三因仏性に対する二通りの解釈とその関連性について検討してきた次第であるが、これらの所説によると、一概に三因仏性といっても、それを理論的な側面から見ると、或は実践的な側面から見ると、義が異なってくると思われることが指摘できた。すなわち、理的な法体の立場から見れば、三因仏性も相対的二元の世界を離れた非因非果の中道実相理の範疇にすぎないので、修因とそれによる証果を論ずる必要もなく、一切のものに具有せられる仏性と思考することができるのであるが、併しこの中道実相理を覚知するための実践的立場から見れば、証果である大涅槃に至るための修因として三因仏性が位置づけられ、更にこれを仏種と還言していると思考することができるのである。そしてこのように考えてくると、冒頭に

面と実践面を一概に思考したために起った矛盾であり、一法に修性の二義があることを思えば筋道が立ってくると思えるのである。すなわち、理論的な法体の立場から見れば『本尊抄』に説かれるように仏と衆生は本来同体即具なのであるが、この体である実相理を覚知するための実践面に於いては証果に至る修因として、仏種の下種が論じられたと仮定できるのである。蓋し日蓮聖人の遺文中に、仏性の遍不遍論、あるいは潜在的仏性の開發を論じられた文よりも仏種の下種に関する文の方が圧倒的に多いのは、日蓮聖人の教学が成仏に関する理論面よりも寧ろ実践面、すなわち理屈よりも現実を重視した教学であるためといえるのではないだろうか。

註

(1) 拙稿「天台教学に於ける仏種の下種と仏性」(『日蓮教学研究所紀要』第十三号所収) 参照。

(2) 『大正新脩大藏經』(以下『正藏』と略記) 三三・七四一・B

- (3) 『正藏』三三・七四四・C
- (4) 『正藏』三三・七四六・A
- (5) 同右
- (6) 『正藏』三三・七〇〇・A
- (7) 『正藏』三三・七四一・B
- (8) 同右
- (9) 同右
- (10) 『正藏』三三・八四八・C
- (11) 『正藏』三三・八六六・A
- (12) 『正藏』三四・五八・A
- (13) 『正藏』三四・七九・A
- (14) 『正藏』三四・一四〇・C
- (15) 『正藏』三三・七九四・C
- (16) 『正藏』三三・七九四・B
- (17) 同右
- (18) 同右
- (19) 同右
- (20) 『正藏』三三・七九六・A